

# 大島塾 新聞

△□ノキ  
新聞社  
第23号

(広告)

ばらもん



## 二〇二四年の回想

二〇二四年は天候運に見放された感のある一年だった。春の五島に始まって山陰の甘鯛釣り、イカ釣り、ことごとく悪天候に見舞われ断念せざるを得なかった。しかも狙いすましたようなピンポイント攻撃。今年十二月十三、十五日の釣行予定も、週間天気予報はこの三日間だけ、平均風速十五、十七、最大二五、波二・五メートルの時化を伴う今期最初の大寒波を予想した。さあ、**どうする？大島塾。**



二、三年前から向根は自宅の前にある畑を借りて菜園を手掛けていた。

しばらく使われていなかった地面は固く、初めの年にそこを耕したがために痛めた手関節はいまだ完治していない。それでも根気よく精を出して育てた彼の里芋、去年は梅干しに毛が生えた程度の大きさだったのが、今年はゴルフボールよりはるかに大きいサイズにまで成長し、イカとその里芋を煮付けたらびつくりするほど旨かった。もう立派な農夫である。

去る十月下旬のある日のこと、向根が職場の裏の山手にある駐車場に向かって歩いてみると、すぐ横を小型の動物がすすめて走った。「タヌキ！」驚いた拍子に足を踏み誤って、痛めていた右手から倒れ落ちてしまった。「・」なんかいやな音がしたそうだ。それでも「五島の釣りまではまだ三週間くらいあるし、治るやろ」とたかをくくっていたが痛みは一向におさまらない。そのため十一月半ばに予定していた五島行きを十二月に先送りして時間を

稼いだ。だがそれでも痛みは良くなり、観念した向根は整形外科を受診しMRI検査を受けたところ、よく分からぬ「TFC損傷」という診断で、釣行にはドクターストップがかけられた。全治二、三ヶ月らしい。数日後筆者が同じ場所で見撃したのは**ハクビシン**だった。

何しよるん？



直前まで参加予定だった宇田さんは、天気予報と七〇代半ばの年齢を鑑み不参加と決めた。なので今回は木村、谷川、重安、および筆者の四人旅を予定した。



今年はずちちゃんと向根が目出たく還暦を迎え、七月に大島塾メンバーが集まって宴会を開いた。「しんみ」という居酒屋で、そこは以前本誌でも紹介したことのある「津本式」で処理した熟成魚を食べさせてくれる店である。

たまにしか外に飲みに出ることのない筆者だが、ここには度々足を運んでいる。



南は鹿児島から北は東北まで全国の色々な魚を取り寄せるので、「アオチビキ」とか「アカダイ」とか今まで名前しか知らなかった魚にも出会うことができた。

魚は十日前後熟成されて出てくることが多いが、先日「三〇日寝かせた」というマグロを出してきた。「なにもそこまでしなくても」と思う時がたまにあるが、クセのある店主のドヤ顔説明をひとしきり傾聴したあとでいただく、熟成ならではの旨みを楽しみに足を運んでいる。

四季折々の旬魚に甲乙はつけがたいが、春先にいただいた一週間もののサワラが一番記憶に残っている。



還暦祝いには重安やルアーマン古谷も参加して、フルメンバーでの賑やかなひとときを過ごした。作ちゃんは開業医となつて五年、慎重さと責任感の強さと小心さからなかなか店を空けられない。永らく五島に行けていない彼がみんなとわいわいするのは久しぶりだった。「永遠の素人」といじられても嬉しそうだった。



どうする、大島塾々続き

五島行きは何日も前から準備を整え、ウキウキしながら当日を待つのが常だったが、今回釣行出発日の十二月十三日、週間天気予報は一週間前から強風大寒波襲来を告げていた。毎日朝夕チェックしても予報は微動だにしない。

十年も前なら船さえ出れば絶対行く、もしいけなかつたら奈落の底、それくらい気が勇んでいたものだが、歳をとつた所為だろうか三日前には既に諦めに傾いていた。

それは仲間も同じで、当日が近づいて連絡してみても今ひとつテンションが感じられな。最後まで嵐の大寒波予想は変わることもなく、当日釣行を諦めると、一様にほっとした様子だった。「やっと大人の判断ができるようになりましたね」と褒められたような気がした。

ほめられたあ



ほっとはしてもやはり、やるせなさは残る。どうしたものか・・・「そうだ、みんな予定はないはずだから、あした忘年会しよう！」そう浮かんだ瞬間に筆者の心に明るさが戻った。嬉しいことに、こんな突然の思い付きにみんなもすぐ賛同した。気持ちとは同じだったようだ。

翌十四日、我が家に集まって宴会を催した。向根、木村、光市から谷川、作村も仕事を終えて山口から駆け付けた。

その日筆者は朝一番に魚市場へ食材調達に出かけた。

メニユは鰯のアラの煮付け、鰯カマの塩焼き、イカを向根農園の里芋と煮付ける。脂ののつた寒ダレの刺身を食べたかったが仕方ない、刺身は盛り合わせを馴染みの魚屋に注文した

五人集まるといやでも話は魚釣り、みんな歳をとつてきたせいか口を突いて出るのはい思ひ出話。以前は六島に何匹も野良猫がいて、猫を可愛がる谷川はいつも釣果に恵まれた。ある時などは使い捨てられたサビキを拾って猫の餌を釣ってやっていたら、猫の餌となるはずのベラに大きなヒラメが喰いついた。片や猫と対立関係にあった作ちゃんは、弁当取られたり、魚を盗まれたり、最後には寝袋の枕元に糞までされて涙目になっていたこともあった。いつの間にかそんな猫たちも島から姿を消した。その後イノシシが現れ、ヤギも登場した。

そういえば谷川、作村、宇田、村田、みんな海に落ちたねえ。「他人の不幸は蜜の味」と笑っているわが身に降りかかりそうなので気をつけよう。記憶に新しいところでは一面ヤギの糞に汚染された千畳敷の波止で、強い南からの風雨に曝され、テントもろとも事故並みの被害を受けた(北向きの磯で竿を出していた筆者は被害なし。やっばり蜜の味)。

当時は心底「もう嫌っ！」と思つたに違いない出来事ばかりなのに、時が経つと大笑い思い出になつていく。人生だねぇ。しかし、「どんなに苦労はしても、時間がそれを笑い話に変えてくれるから、心配いらない」などと若者に説諭しても、こんな経験じゃあ誰も聞いてはくれまいね。

というわけで、新年はお天気の神様がほほえんで下さることを祈つて、校了。(福)

向根君、作村君

還暦おめでとう

